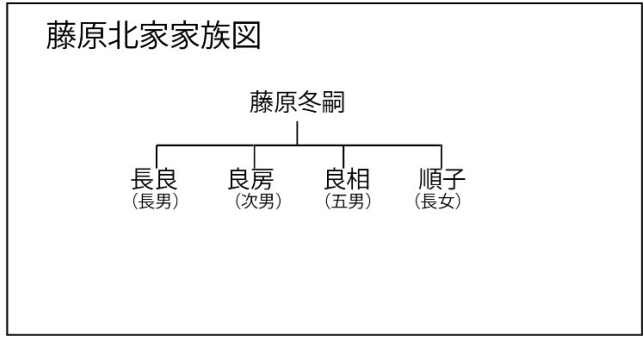
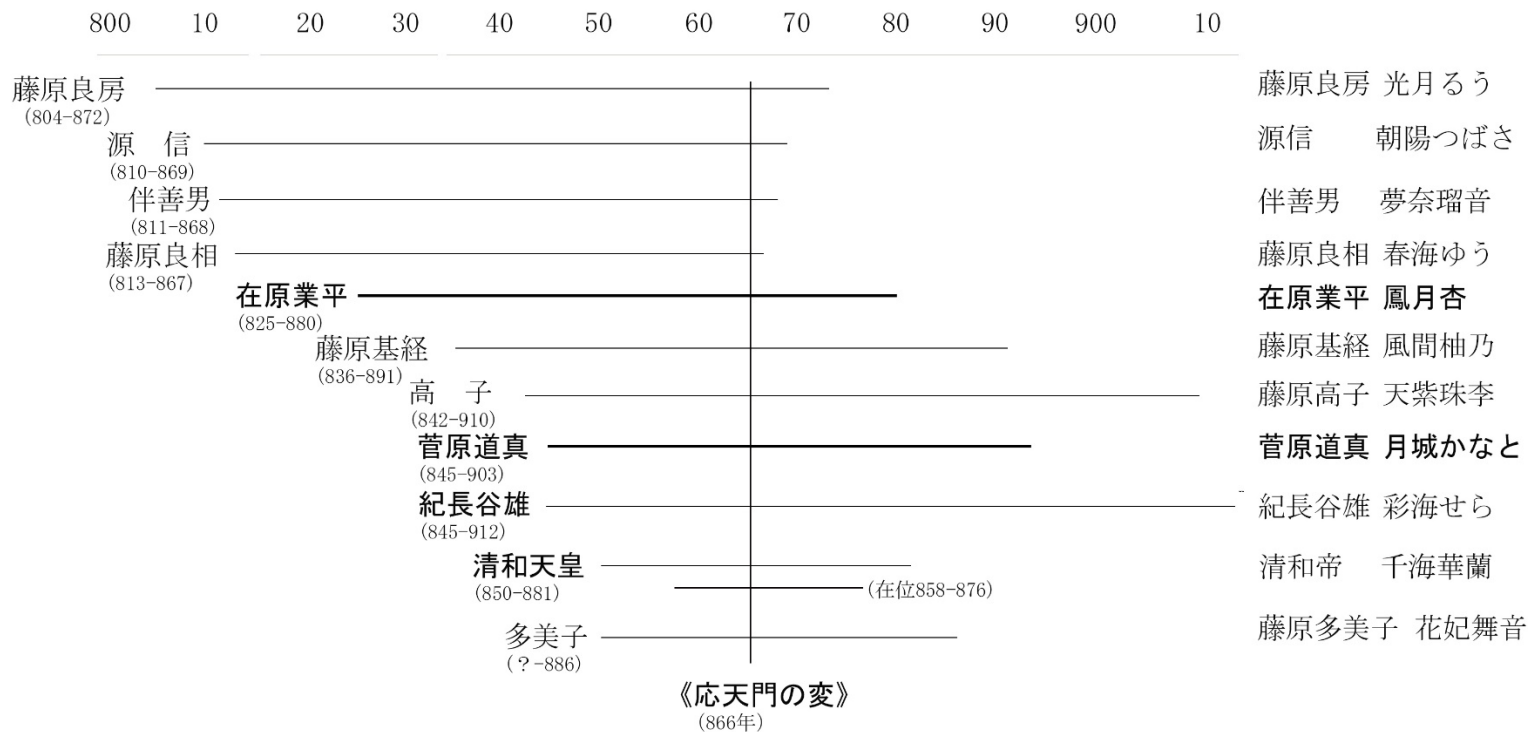


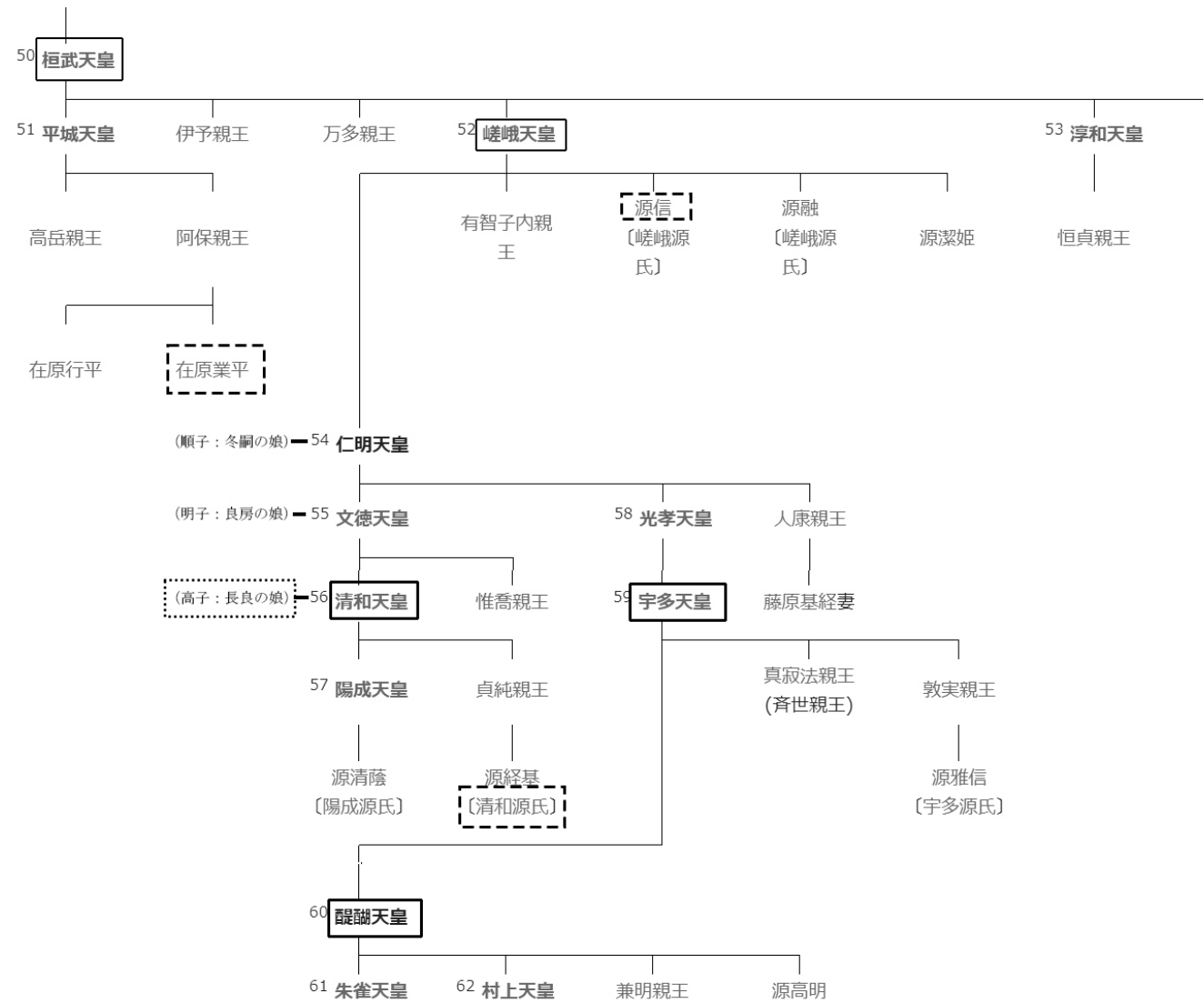
# 未来のための古典 第五回 『応天の門』時代を考える

ゲスト スケザネ（渡辺祐真）さん

## ●『応天の門』と応天門の変の時代…平安初期



『応天の門』関連 天皇家 系図



【A】菅原道真 『菅家文草』『菅家後集』より

宝塚歌劇では月城かなと（月組トップ）

●菅原道真の生涯

文章生、文章得業生から官僚へ

文章博士時代

渤海使と漢詩でやり取り

藤原基経と親しい関係に

讃岐守時代

国司の業務

民情

宇多天皇の即位

阿衡事件

右大臣への道

帰京

宇多天皇との関係

参議となる

遣唐使問題

宇多天皇讓位↓醍醐天皇

右大臣となる

大宰府への左遷

昌泰の変…藤原時平（基経の長男）の讒言

大宰府左遷

右大臣菅原朝臣寒門与利俄爾大臣上收給利。而不知止足之分。有專權之心。以佞諂之情欺惑前上皇之御意。然乎恐慎上皇之御情天万奉行。无敢恕御情天。欲行廢立離間父子之慈淑皮兄弟愛。詞者辞比順者之天心者逆。是皆天下所知奈利。不且居大臣之位。湏法律乃任爾罪奈倍給不倍之。然而殊為有所念奈牟。停大臣之官。大宰權帥爾罷給不。

死後、怨霊となる

多くの関係者が死に、清涼殿落雷事件もあって太宰府天満宮に祀られた

↓能『雷電（来殿）』

「学びて時に之を習ふ、亦た説（よろこ）ばしからずや。

朋有り遠方より来る、亦樂しからずや。

人知らずして慍（うら）みず、亦た君子ならずや」（『論語』）

「月夜見梅花」 于時年十一。嚴君令田進士試之予始言詩。故載編首。

月耀如晴雪 月の耀くは晴れたる雪の如し  
梅花似照星 梅花は照れる星に似たり  
可憐金鏡轉 憐れむべし金鏡の轉（かひろ）きて  
庭上玉房馨 庭上に玉房の馨れることを

「月夜見梅花」月城かなと 作詞…田渕大輔

ふと匂い立つ梅の香が そつと私に語り掛ける  
長く厳しい冬の夜も やがては明けて春が来ると

ふと仰ぎ見る月影が 夜に彷徨う私を照らす  
足音も無く忍び寄る 悪しき心を射貫くように

優しく 強く ずっと寄り添っていたい  
信じるものが何も無いと 明日を憂う誰かの心に

正しく清く いつか世界照らしたい  
己の心に恥じぬよう 今日を生きる誰かのために

鏡のように真（まこと）を映す あの冴え渡る月のように

「早春侍内宴同賦雨中花応製」85

花顔片片咲來多 花の顔（かおばせ）の片片として咲（えみ）來ること多し  
冒雨馨香不奈何 雨を冒せる馨香 奈何にせざらむや  
羅袖猶欺沾舞汗 羅袖猶ほし欺く舞の汗に沾（うる）ふかと  
花袍自怪沐恩波 花袍自らに怪しむ恩（めぐ）みの波に沐（あらは）るるか  
驚看麝劑添春澤 驚き看る麝劑（じゃざい）の春澤に添ふことを  
勞問鶯兒失晚窠 勞ひ問ふ鶯兒（おうじ）の晚窠（ばんか）を失ふことを  
五出莫誇承渥潤 五出 誇ること莫かれ渥潤（あくじゅん）を承くることを  
一天下喜有滂沱 一天の下喜ぶ滂沱有ることを

## ―道真のリアリティ

重陽日、府衙小飲

重陽の日、府衙ふがにて小飲せういんす

秋来客思幾紛紛  
 況復重陽暮景曛  
 菊遣窺園村老送  
 萸從任土菓丁分  
 停盃且論輪租法  
 走筆唯書弁訴文  
 十八登科初侍宴  
 今年独対海辺雲

秋よりこのかた 客思の幾いくばくか紛々たる  
 況復いはんや 重陽の暮景の曛るるをや  
 菊は園を窺はしめて村老送り  
 萸ゆは土に任すに従よりて菓丁やくてい分かつ  
 盃を停とどめ且しばらく論ず 輪租ゆその法  
 筆を走はしらせ唯ただ書く 弁訴べんその文  
 十八にして登科とうくわし 初めて宴に侍はべりしも  
 今年は独り対むかふ 海辺の雲

## 「行春詞」讃岐で民の苦しみを見る219

欲貌春風不受僧 周流四望睇先凝 才愚只合嫌傷錦 慮短何為理亂繩  
 慙愧城陽因勇進 庶幾馮翊以廉稱 莓苔石上心沉陸 楊柳花前腳履水  
 辭謝頑民來謁拜 許容小吏送祇承 繞身文墨徒相逐 任口謳吟罷不能  
 事事當資仁義下 行行且禱稻梁登 靈祠怪語年高祝 古寺玄談藹老僧  
 過雨經營修府庫 臨煙刻鏤弁溝塍

遍開草褥冤囚錄  
 輕舉蒲鞭宿惡懲  
 尊長思教卑幼順  
 卑貧恐被富強凌  
 安存耄邁食非肉  
 賑恤孤惇餓曲肱

遍く草の褥を開きて冤囚を録（しる）す  
 軽く蒲の鞭を舉げて宿惡を懲（こら）す  
 尊長は卑幼を順はしめむことを思ふ  
 卑貧は富強に凌（しへた）げられむかと恐る  
 安存す耄邁の食（く）らふもの肉に非ざることを  
 賑恤（しんじゅん）す孤惇（こけい）の餓ゑて肱を曲  
 ぐることを

檻樓家門留問主  
 耦耕田畔立尋朋

檻樓の家の門には留りて主を問ふ  
 耦耕の田の畔（くろ）には立ちて朋を尋ぬ

遊童竹馬郊迎廢 隱士藜杖路次興  
 冥感終無馴白鹿 外聞幸免喚蒼鷹  
 迴轡出時朝日旭 墊巾歸處暮雲蒸  
 人散閑居悲易觸 夜深獨臥淚難勝

應緣政拙聲名墜 豈敢功成善最昇  
 譚亭樓上三通鼓 公館窗中一點燈  
 到州半秋清兼慎 恨有青青污染蠅

## 春日行幸「神泉苑」同賦花間理管弦応製 434

玄覽乗春粧續褰  
五音共理百花前  
幽蹤似遇桃源客  
雅調將驚水府仙  
羌戎情因孤竹奏  
楚人思附七絲傳  
落梅曲舊脣吹雪  
折柳聲新手游煙  
鳳感來時徐步輦  
魚聞躍處早忘笙  
君王欲得移風術  
非敢慇懃喚管絃

玄覽 春に乗じて粧續（とうこう）褰（かか）ぐ  
五音 共に理（ととの）ふ百花の前  
幽蹤 桃源の客に遇へらむが似し  
雅調 將に水府の仙を驚かさむとす  
羌戎の情は孤竹に因りて奏す  
楚人の思ひは七絲に附して傳ふ  
落梅 曲舊りて脣 雪を吹く  
折柳 聲新たにして手 煙を掬る  
鳳感でて來る時 徐に輦（てぐるま）に歩ぶ  
魚聞きて躍る處 早く笙を忘る  
君王 風を移す術を得むことを欲せば  
敢へて慇懃に管絃を喚（よ）ぶことを非ざらまし

## 「九月十日」大宰府にて『源氏物語』でも引用される詩 482

去年今夜侍清涼  
秋思詩篇獨断腸  
恩賜御衣今在此  
捧持毎日拝餘香

去年の今夜 清涼に侍す  
秋思の詩篇 独り断腸  
恩賜の御衣 今此に在り  
捧持して毎日 余香を拝す

## 「謫居春雪」絶筆（最初の詩と対応） 514

盈城溢郭幾梅花  
猶是風光早歲華  
雁足黏將疑繫帛  
烏頭點著思帰家

城（あづち）に盈ち郭に溢れて幾ばくの梅花ぞ  
猶ほし是れ風光の早歳の華  
雁の足に黏（ねやか）り將（ゐ）ては帛を繫けたるかと思ふ  
烏の頭に點じては家に帰らんことを思ふ

# 【B】在原業平『伊勢物語』より

宝塚歌劇では鳳月杏（月組 2 番手）

## ―業平の実像

業平、体貌閑麗、放縦不拘、略無才学、善作倭歌。

（業平、体貌ハ閑麗ナリ、放縦ニシテ拘ラズ、略ソ才学無シ、善ク倭歌ヲ作ル）

『日本三代実録』

## ―紀貫之の在原業平評

在原業平は、その心あまりて、言葉足らず。

しほめる花の色なくて、にほひ残れるがごとし。

## ―溢れる詞書

惟嵩親王の供に、狩りにまかりける時に、天の河と言ふ所の河のほとりに下り居て、酒など飲みけるついでに、親王の言ひけらく、狩りして天の河原に至ると言ふ心をよみて、さか月は注せと言ひければ、よめる

狩りくらしたなばたつ女に宿からむ 天のかはらに我は来にけり

古今和歌集 卷第九 羈旅歌 418

むかし、惟喬の親王と申す親王おはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に、宮ありけり。年ごとの桜の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人を、常に率ておはしましけり。時世経て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。（中略）御供なる人、酒を持たせて、野より出で来たり。この酒を飲みてむとて、よき所を求め行くに、天の河といふ所にいたりぬ。親王に、馬の頭、大御酒まゐる。親王のたまひける、「交野を狩りて、天の河のほとりにいたるを題にて、歌よみて、盃はさせ」とのたまうければ、かの馬の頭、よみて奉りける、

狩り暮らし たなばたつめに 宿からむ 天の河原に われは来にけり

## 《第四段》

むかし、東の五条に、大后の宮おはしましける、西の対に、住む人ありけり。それを、本意にはあらで、心ざし深かりける人、行きとぶらひけるを、睦月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。あり所は聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しと思ひつつなむありける。

またの年の睦月に、梅の花ざかりに、去年を恋ひて行きて、立ちて見、みて見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでてよめる、

伊勢物語 82章

月やあらぬ春や昔の春ならぬ わが身一つはもとの身にして

とよみて、夜のほのぼのと明るくに、泣く泣く帰りにけり。

### 《第六段》

むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうして盗みいでて、いと暗きに来けり。芥河といふ河を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれはなにぞ」となむ男に問ひける。

行く先多く、夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥におし入れて、男、弓、胡籥を負ひて戸口にをり。はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。

「あなや」と言ひけれど、神鳴るさわぎに、え聞かざりけり。

やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。足ずりをして泣けども、かひなし。

白玉かなにぞと人の問ひし時 露とこたへて消えなましものを

これは、二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていたりけるを、御兄人堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて内裏へ参りたまふに、いみじう泣く泣く人あるを聞きつけて、とどめて取りかへしたまうてけり。それを、かく鬼とは言ふなりけり。

まだいと若うて、後のただにおはしける時とや。

### 《第九段》

むかし、男ありけり。その男、身を要なきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまの方に住むべき国求めにとて、行きけり。もとより友とする人ひとりふたりして、行きけり。道知れる人もなくて、まだひ行きけり。

三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける。その沢のほとりの木の蔭におりゐて、乾飯食ひけり。

その沢に、かきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて、旅の心をよめ」と言ひければ、よめる、

からころも着つつなれにしつましあれば はるばる来ぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、みな人、乾飯の上に涙おとして、ほとびにけり。（以下略

【C】昭姫 宝塚歌劇では海乃 美月（月組トップ娘役）

胡笳十八拍 漢魏 蔡文姬（昭姫）

無日無夜兮不思我郷土 日々に無く夜々に無し我が郷土を思はざるを  
稟氣含生兮莫過我最苦 稟氣生を含みて我が最苦に過ぐる莫し。

天災國亂兮人無主 天災ひ國亂れて人に主無く

唯我薄命兮沒戎虜 唯だ我が命薄くして戎虜に沒す。

殊俗心異兮身難處 殊俗心異りて身處し難く

嗜慾不同兮誰可與語 嗜慾同じからずして誰と與にか語る可き。

尋思涉歴兮多艱阻 尋思涉歴して艱阻多く

四拍成兮益悽楚 四拍成りて益々（ますます）悽楚たり。

【D】紀長谷雄 宝塚歌劇では彩海せら

長谷雄草紙



或日、夕暮れ方に内へ参らんとせられける時、見も知らぬ男  
男「徒然に侍て双六を打たばやと思給に、その敵、恐らくは  
君ばかりこそおはせめと思ひよりて参りつるなり。我負け  
奉りなば、君の御心に見目も姿も心ばへも足らぬ所なく思  
さむ様ならむ女を奉るべし」

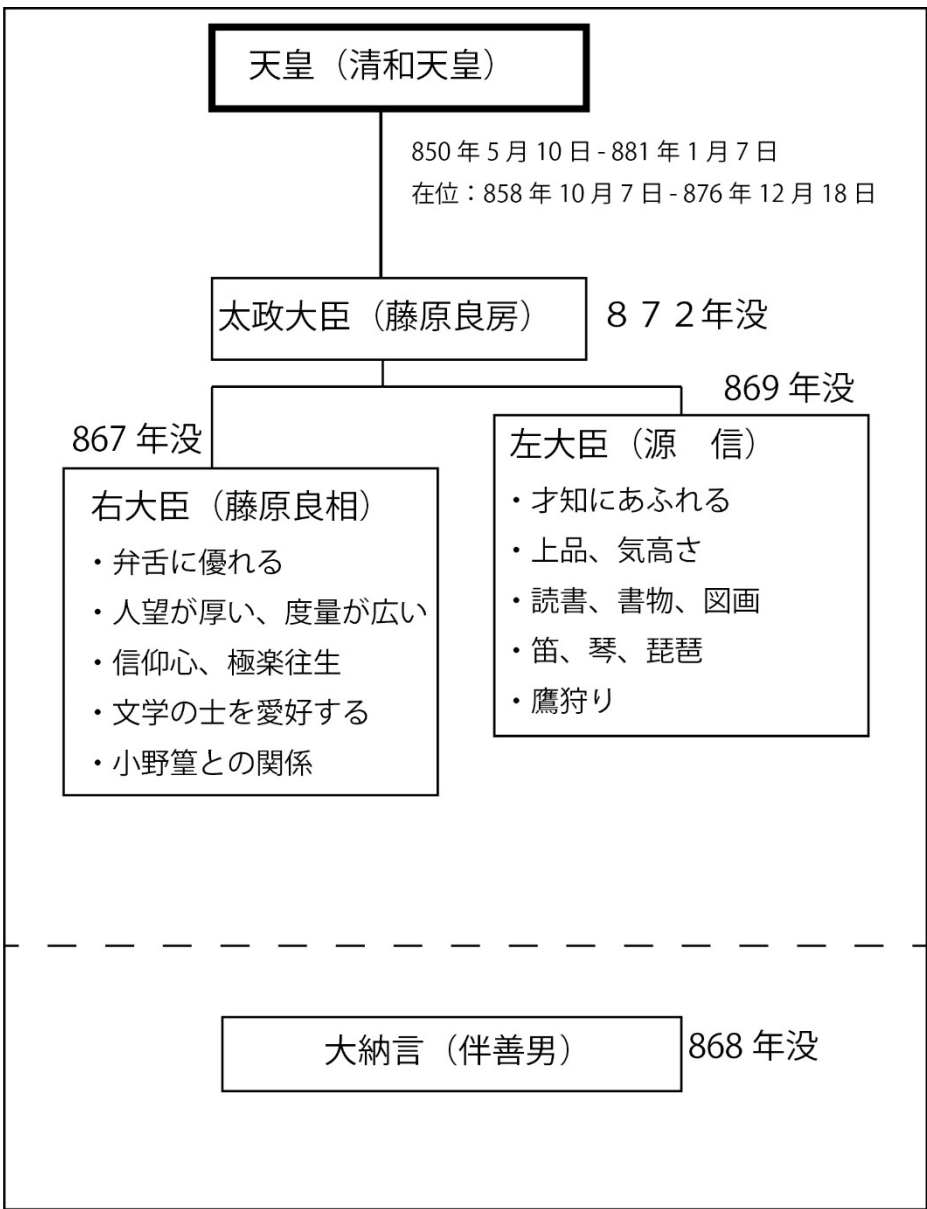
紀「我は身に持ちと持ちたらむ宝をさながら奉るべし」

紀長谷雄が勝った

夜更くる程にありし男、光るが如くなる女具して来て返し  
給べき要なし。

男「但し今宵より百日を過ぐしてまことには打ち解け給へ。  
もし百日が内に犯し給なば必ず本意なかるべし」

堪え難く覚えて親しくなりたりければ、即ち女、水になり  
て流れ失せにけり。この男は朱雀門の鬼なりけり。女といふ  
は、諸々の死人の良かりし所どもを、取り集めて人に作りな  
して百日過ぎなば、まことの人になりて、魂定まりぬべかり  
けるを、口惜しく契を忘れて犯したる故に、皆溶け失せにけ  
り。



「伴大納言応天門を焼く事」『宇治拾遺物語』より

（一） 応天門の炎上と讒言

今は昔、水の尾の帝の御時に、**応天門焼けぬ**。人のつけたるになんありける。それを、**伴善男**といふ大納言、「これは**信（まこと）**の大臣のしわざなり」と、おほやけに申しければ、その大臣を罪せんとせさせ給ひけるに、**忠仁公（藤原良房）**、世の政は、御弟の西三条の右大臣（良相）にゆづりて、白川にこもり給へる時にて、この事を聞きおどろき給ひて、**御烏帽子、直垂ながら、移しの馬に乗り給ひて、乗りながら北の陣までおはして、御前に参り給ひて、**

「このこと、**申す人の讒言にも侍らん**。大事になさせ給ふ事、いと異様のことなり。かかる事は、返すがへすよくただして、まこと、**そらごとをあらはして、行はせ給ふべきなり**」

と奏し給ひければ、まことに、とおぼしめして、たださせ給ふに、一定もなきことなれば、「**許し給ふよし仰せよ**」とある宣旨承りてぞ、大臣は帰り給ひける。

(二) 左の大臣、職を辞す

左の大臣は、過ぐしたる事もなきに、かかる横ざまの罪にあたるを、おぼし嘆きて、日の装束して、庭に荒薦を敷きて出でて、天道に訴へ申し給ひけるに、許し給ふ御使に、頭中将、馬に乗りながら、はせまうでければ、いそぎ罪せらるる使ぞと心得て、ひと家なきのしるに、許し給ふよし仰せかけて帰りぬれば、また、よろこび泣きおびただしかりけり。ゆるされ給ひにけれど、

「おほやけにつかうまつりては、横ざまの罪出で来ぬべかりけり」

と言ひて、ことにもとのやうに宮づかへもし給はざりけり。

(二・続き) 応天門事件の目撃者

このことは、過ぎにし秋の頃、右兵衛の舎人なる者、東の七条に住みけるが、司に参りて、夜更けて家に帰るとて、応天門の前を通りけるに、人のけはひしてささめく。

廊の腋にかくれ立ちて見れば、柱よりかかぐりおるる者あり。あやしくて見れば伴大納言なり。次に子なる人おる。また次に、雑色とよ清といふ者おる。何わざしておるにかあらんと、つゆ心も得でみるに、この三人、走ること限りなし。

南の朱雀門さまに行くほどに、二条堀川のほど行くに、「大内のかたに火あり」とて、大路ののしる。見かへりてみれば、内裏の方と見ゆ。走り帰りたれば、応天門のなからばかり、燃えたるなりけり。このありつる人どもは、この火つくとて、のぼりたりけるなりと心得てあれども、人のきはめたる大事なれば、あへて口より外にいださず。

その後、左の大臣のし給へる事とて、「罪かうぶり給ふべし」といひのしる。あはれ、したる人のあるものを、いみじきことかなと思へど、いひいだすべき事ならねば、いとほしと思ひありくに、「大臣ゆるされぬ」と聞けば、罪なきことは遂にのがるものなりけりとなん思ひける。

(三) 子どもの喧嘩から発覚

かくて九月ばかりになりぬ。

かかるほどに、伴大納言の出納の家の幼き子と、舎人が小童と、いさかひをして、出納ののしれば、出でて取り押さへんとするに、この出納、同じく出でて、見るに、寄りて引きはなちて、我が子をば家に入れて、この舎人が子の髪を取りて、打ち伏せて、死ぬばかり踏む。

舎人思ふやう、「わが子もひとの子も、ともに童部いさかひなり、たださではあらでわが子をしもかく情なくふむは、いと悪しき事なり」と腹だたしうて、

「まうとは、いかで情なく、幼きものをかくはするぞ」と言へば、

出納言いふやう、

”宝塚なんて”という人のための宝塚歌劇入門講座

◆◆◆◆◆第三回◆◆◆◆◆

『応天の門』の楽しみ方を中本千晶さんからお聞きする

2023年3月1日（水）18時～19時30分（時間注意！）

場所：隣町珈琲

<https://goo.gl/maps/NV9ngVNWEaMfB4LU8>

荏原中延（東急池上線）、中延（都営地下鉄） 徒歩3分

受講料：投げ銭

今回のテーマは『『応天の門』の楽しみ方を中本千晶さんからお聞きする』です。

宝塚歌劇の本をたくさん書かれていらっしゃる中本千晶さんに『応天の門』の楽しみ方をお聞きします。

どんなお話しなのか、この作品を演じる「月組」とはどのような組なのか、トップを始め演者の方たちのこと、そのほかいろいろと伺いたいと思います。

※飛び込み歓迎ですが、事前にメールをいただくと助かります。

[masacogoto@yahoo.co.jp](mailto:masacogoto@yahoo.co.jp)

※お返事は遅れると思いますが、お返事がなくても問題ありません。お出ましく下さい。

「おれは何事言ふぞ。舎人だつるおればかりのおほやけ人を、わが打ちたらんに、何事のあるべきぞ。わが君大納言殿のおはしませば、いみじき過ちをしたりとも、何事の出で来べきぞ。しれごと言ふかたゐかな」といふに、

舎人、おほきに腹立ちて、

「おれは何事言ふぞ。わが主の大納言を高家に思ふか。おのが主は、我が口によりて人にもおはするは知らぬか。わが口あけては、をのが主は人にてありなんや」と言ひければ、出納は腹だちさして家にはひ入りにけり。

このいさかひを見ると、里隣の人、市をなして聞きければ、いかに言ふことにかあらんと思ひて、あるは妻子に語り、あるは次々語り散らして、言ひさわぎければ、世に広がりて、おほやけまで聞こしめして、舎人を召して問はれければ、はじめはあらがひけれども、われも罪かうぶりぬべく問はれければ、ありのくだりのことを申してけり。

その後、大納言も問はれなどして、事頭はれての後なん流されける。

応天門を焼きて、信の大臣に負はせて、かの大臣を罪せさせて、一の大納言なれば、大臣にならんと構へけることの、かへりてわが身罪せられけん、いかにくやしかりけん。